MAGATSUBARAI
ORIGINAL SHORT STORY

# お狐様のしおんいぢり

著・高濱亮

SAMPLE

SAMPLE

駿河屋店舗特典

マガツハライ X-rated　オリジナルショートストーリー

## お狐様のしおんいぢり

SAMPLE

「――女狐が。なんとも下品に着飾りおって、けばけばしい」

開口一番、そんな侮蔑を災禍鵐・祀怨は吐き捨てた。

挑発に白天狐・彌瑞璃もまた嗤う。

直後、本気の術合戦が勃発したのは至極当然の流れだろう。

激突する十三魔将と十三魔将。

千年前の平安時代、祀怨と彌瑞璃の付き合いは紛れもない殺意と暴力から始まったのだ。

そして、より詳細に明かすならこの時……罵倒した側の祀怨は初対面の彌瑞璃に対して隔意を持っていなかった。

理由を言うなら、単にその場のノリである。

目と目が合い、興が乗ったのでなんとなく。

人里離れた山奥で暇を持て余していたのに加え、おまけに当時は娯楽も少なく、気性も針鼠のように尖っていたのが大きかったせいだろう。

常人なら百度は死んでも余りある恐るべきはずの死闘は、当時の彼女らにとって無聊を慰める格好の





コミュニケーションに過ぎなかった。

よって勿論、共に必殺――星招術は使わない。

十三魔将という選りすぐりの強者にとって、対等の戦闘（あそび）を演じられる相手は貴重だ。

絶命という決着を早々につけてしまうのは惜しんだし、下手に全力を行使して弱ったところを京の陰陽師に祓われる、などと醜態も御免こうむるものだったから。

必然的に争いは両者の満足と共に終わりを迎えた。

「貴様なかなかやるではないか。妾の次にな、認めてやろう」

「あら、囀ること。いとおかし」

結果として、蓋を開ければ痛み分け。

魔の美少女らは、不敵な笑みを浮かべて矛を収めた。そこにお互い、本当はどんな理屈や感情が働いていたかは定かじゃないが……

以降、災禍鵐と白天狐は腐れ縁の仲となる。

数少ない対等な話し相手、あるいは喧嘩友達か。



SAMPLE
SAMPLE